

3. 経済のグローバル化と各国の経済制度・文化の関係について論じなさい。

経済のグローバル化と言うと、近年では金融危機で世界中が一瞬にして破綻の危機に見舞われる状況が起こっている。何から論じて行くか、資料を集めていけばいくほど情報の山に埋もれていく。

歴史をさかのぼれば、一国の経済は国内政治、制度、文化のみで、それなりに国全体で成り立っていたのである。

日本においても、国内経済は江戸時代までは外国と関係を断って生活・文化が成り立っていたのである。明治維新、外国との関係が始まり、新しい文化、経済が入り込んでくるようになると、便利なものやおいしいものが手に入り、生活レベルや考え方のレベルが上がる。そうすると人間というものにはレベルを下げるができなくなる。

国内に無いものが外国から入り、より良い生活ができ、また国内にしかないものが諸外国に関心がもたれ互いに交換され、取引が始まり、貿易が始まる。

地下の埋設資源が発見されると、今までは見向きもされなかった僻地が互いの所有権を主張し合って獲得合戦が始まる。

諸外国との経済的、政治的、文化的な交わりなしでは生存できないように今日ではなってしまうのである。

世界銀行はグローバル化を「個人や企業が他国民と自発的に経済取引を始めることができる自由と能力」と定義している。

国境を越えて資本・労働力等の移動ができる自由や、国境を越えて商品・サービスを提供し、あるいは他の国で経済活動をする能力は、大規模な資本を持った者しかできない。資本のないもの（途上国側）は参加できなく受け身とならざるを得ない。ここに経済のグローバル化の問題点もあるが、ひとまずそれは置いておく。

運輸・通信・金融・保険等の技術や情報伝達能力が発達し、貿易や資本などの移動に対する障害が政策的に取り除かれることによりグローバル化が進展し、経済関係が深まっていった。このようにグローバル化は経済発展をもたらす動きである。

グローバル化の過程は、国内において分業が進展していく過程と基本的に同じである。近年のグローバル化には、情報通信技術の発達により情報処理やインターネットなどの情報伝達の技術革新が新たな影響を与えている。

金融をはじめとする各種のサービス機能を向上させ経済取引が瞬時に世界的規模で可能となる時代となった。4000兆円と言われる大きな資本（ホームレスマネー）が世界の大国をも動かす時代となったのである。

このような経済のグローバル化は、力（資本）のあるグローバル企業が先陣を切ってきたのである。企業である以上利益が最優先される。先進諸国が途上国へ進出するというパターンが一般的である。

途上国側としては持ち込まれた文化や宗教や価値観が押し付けられ、その国固有の文化や自然環境に適合した伝統的な生活スタイルが失われていくことがある。

日本のグローバル化は遅れていると言っても、先進国側の見方であり、新興国、途上国側からの見方は、私自身、再考すべきであると気づいた。逆の観点からすると、国際援助とか支援事業と言っても最終的にはその見返りをたくらんでいるものである。

現実に途上国全体の債務残高は新規援助資金を上回っている。

経済のグローバル化を擁護、推進するために WTO という機関があるが、「自由化」、「保護措置」と言っても実際には強国や強い産業分野が望むものにならざるを得ない。

金融資本やグローバル企業のためだけでなく、真の「市場経済」がグローバルに対等に運営できる国際社会の規範が整ってこそグローバル化と言えるのではないかと思う。

途上国の伝統文化を尊重し、急激な変化を押し付けるのではなく、その地域の環境に適合した経済、文化を推し進めていくことが、更なる貿易を発展させていくものとする。

(A)